

# 病児保育奮闘記

(1)

子どもサポート H&K  
大石 仁美

## はじめに

病児保育室を開設して、はや10年が過ぎました。思い返せば、アッという間の10年でした。その間政府は、少子化を食い止めようと様々な施策を打ち出し、病児保育にも光があたるようになってきました。行政の補助をうけながら、病児保育に参入する施設も少しずつ増えてきて、「近々、個人で細々とやっている私たちの役目は終わるかもしれない」と思ったりもしましたが、ニーズに合ったものになっていないのか、なかなかそうはならないようです。

この連載をするにあたってまず、なぜ病児保育なるものをしようという思いに至ったのか、私の歴史も少しお話し、私とパートナーがどんな理念を持ち、どのようにして病児保育室を立ち上げ、そして今日どのような状況にあるのか、これからどこへ向かったらいいのか模索している状況なども、日々の仕事とからませながら少しずつお話できたらと思っています。

## 病児保育への序奏曲

～面白きかな人生～

振り返ってみると、人生って本当に面白いものです。恥ずかしくなるような、ハチャメチャな生き方をしてきた私ですが、それなりに得るものが多かったことに感謝をしています。多くの素晴らしい方々に出会い、教えをうけ、助けられてきました。そうした私の人生をはじめにお話ししておかないと、現在私がやっている病児保育の輪郭がぼやけると思うので、第一回はそういうお話をしたいと思います。

私は、無鉄砲でせっかちなくせに、どこかボーッと抜けたところのある人間で、情に流されて結婚し、10年後に離婚。三人の子育て、三度の転職を経験し、40を過ぎて今のパートナーと出会いました。可笑しいほど、やることなすこと正反対の二人でしたが、なぜか進みたい方向だけが同じでした。二人で同じ方向に向けて歩み始められた幸運、そして、計画が進みつつあるときに、たまた

ま散歩の途中で見つけた小さな家、あいさつに伺ったお隣さんは、以前同じ職場で働いていた管理栄養士さんだったこと、お向かいの小児科は、パートナーの教え子のご両親とおばあちゃんが経営している医院だったこと等々、すべてが病児保育室を開くために用意されていたとしか思えないことばかりでした。不思議なことですが、「さあ、やりなさい。」と神様が背中を押してくれているような感じでスタートしたのです。

私は50歳になった頃より自分の定年は55歳と決めていました。老後にむけて何か始めるには、定年になってからでは遅いと思っていたからです。

当時の仕事は私立女子中学高校の養護教諭でした。思春期の生徒たちはそれはすごいエネルギーです。生徒が問題行動を起こすたびに、教師と親の間に立ってその子の代弁をするとか、背後で支え、時には前面に出て防御壁の役目をしてきました。

養護教諭には、指導という言葉は似あいません。学校というところは、指導という名の大ナタをふるところなので、立場的には生徒よりで、大きさにいえば、学ぶ権利を守るために生徒とともに闘ってきたということでしょうか。そのせいか一部の教師たちからは、かなり嫌われていたようです。これもあとで分かったことですが日本式協調性を欠いていたとか、だれでも立場とメンツがあり、その相手の立場を気遣う配慮に欠けていたとは思いますが。退職後に、もと同僚から当時あんたが嫌いだったと言われてショックを受けたのですからお笑いです。でも自分のやるべきことを信念をもってやろうとすれば、多少の摩擦はやむを得ないことでした。

生徒たちが、なぜ問題行動をおこすのか、最初とはまどい、どう接していいか分かりませんでした。理解出来ないことが多く、悩んだ末、仕事を終えてから国際社会福祉センターに通って学ぶこ

とにしたのです。それは大きな収穫をもたらしました。まず、自分が何者か、自分の心の中を泳ぎながら手さぐりで自分を探し求めつつ理論を学び、聴くトレーニングを受けました。分からないことは当事者に聞くのがいちばん。これをしないで大人が価値観を押し付けるから、問題は解決しないという当たり前のことに気付いたことが嬉しかったですね。分からなければ本人に聞いた方がいいのです。かぞえてみると、7年ほどかよっていました。このころから保健室はよろず相談所になりました。相談の内容は勉強のことも少しはありましたが、多くは人間関係の悩みで、学校に来たくない、彼氏とうまくいかない、嫌われたくないので言いなりになってしまう、親とうまくいかない、殴られて家出をしている、なかには親の浮気現場を見てしまい、心乱れ、苦悩しているケースもありました。でもなんといってもダントツは性の悩みでした。ちょうどそのころ、私生活でも思春期の子ども3人をかかえていましたので、この悩み相談は、自分の子育ての上でも大きな助けになりました。

私のいた中高は、歴史のある学校で、性教育も熱心でした。養護教諭は、初めから性教育委員会のメンバーでしたし、教育内容は教師の裁量に任されていたので、かなり自由に内容を組み立てることができ、その分、勉強する機会も多く、独自の研修活動も許されていました。自分の学校だけでなく、他校の同じ志をもった教師たちにも呼びかけて勉強会をもとうとしていた矢先、呼びかけた仲間から、全国展開している組織があると聞いて、その組織の傘下に入ることになり、大きな組織になって活動を始められたときは嬉しかったですね。学ぶことが楽しくてたまらなかつたです。学ぶことで私自身がどんどん変わっていく。解放されて自由になっていく。いままで疑問に思っていたこと、窮屈に思っていたことの原因がわかり、自分は自分でいいんだと自己肯定できるわ

けですから、たまりません。

私は33歳の時、幼い子ども3人を連れて、夜逃げのようにして家を出ていました。なぜ自分の家において息苦しかったのか。そんなにわがままで自分勝手な人間だったのか。働いて、家事もこなし、子育てをし、姑を看取り、夫に尽くし、夢中で生きていた時代。気が付くと夢がないのです。あるのは窒息しそうな閉塞感だけ。このまま死にたくないと本能的に飛び出したのはなぜだったのか。学校に勤めるようになって、生と性の学習をする中で、夫は今でいうストーカーだったのだと気づきました。そうだったんだ。そう思えばいろんなことすべて説明がつかます。生と性の学習ってなんて素晴らしいのでしょうか。

家を出て2年後に離婚が成立し、新しい人生がはじまりました。

私の失敗経験で得たこと、学習で学んだこと、仲間や生徒自身から学んだこと、すべて教育現場で生徒に還元出来るし、そうしようと決意しました。私の学習ぶりをみた校長が、性教育の授業をしてみないかと背中を押してくれたのです。その間、スウェーデンにも数回学びにいきました。公務で行かせてあげられないからと、校長がポケットマネーでおこずかいをくれた時は涙が出るほど嬉しかったです。なんとしても、学習して生徒に還元しようと誓ったのでした。

スウェーデンには私の友人が住んでいます。実は、私は学校を卒業したときは病院勤めの看護師でした。10年間務めた間に、小児科、産婦人科、内科を歴任しました。内科で師長をしていた時、その下にいた副師長が、スウェーデンにいる友人です。彼女は、夫の仕事で一緒にスウェーデンにわたり、そこで看護師の仕事を見つけ、子育てをしていましたが、結局家族でそこに住み着いてしまいました。仕事がやりやすいということもあったようですが、子どもが日本に帰りたくないとい

ったことが大きかったようです。私は、彼女の子どもが小学校、中学校、高校と進学するたびに学校訪問をして、授業参観をさせてもらいました。かの地では、保護者が希望すればいつでも授業参観は可能なのです。人のつながりの素晴らしさ、なんてラッキーなことでしょうか。私はこの地で天と地がひっくり返ったようなショックを味わいます。人間観、子ども観のなんという違いでしょう。子ども一人一人の個性を、人間性を大切にする視点が至る所に感じられ、あまりにも日本との違いに驚愕したのです。子どもの意思決定をとことん尊重する。同時に自分で決めた行動の責任は、日本の比ではなく厳しいものでした。日本のように、周囲に気を遣って大事なことを取りやめたり、自分がやった結果を他者のせいにしたりという発想がありません。幼くても自己責任をきちんと取らせる、生まれた時から、自立した一人の人間に成長するよう、トレーニングが待っているのです。例えば服装です。年齢や場にふさわしくないと思われる服装をしていても、頭ごなしに止めさせることはしません。本人が自分で気づくまで待つてやるのです。理由はトレーニング中だからとか。

分かりやすい例をあげると、給食の時間です。学年により時間差をつけてあり、食堂へ行って友達同士好きな場所で食べます。バイキング方式で、自由に食べたいものを取って食べ、おかわりも自由です。アレルギー食のコーナーもあります。やっていけないことはただ一つ、食べられないほどの量を取り、残すことです。その時はこっぴどく叱られます。日本の子どもはどうでしょうか。子どもが教師に生意気な口をきくと、日本ではこっぴどくしかられますが、むこうでは「成長したな」と喜ばれます。この違いは何でしょう。

例をあげればきりがありません。歴史も社会背景も国民性も違うものを単に良い、悪いでくることは出来ませんが、少なくとも子どもを一人の人間として大切にする視点だけは見習わなくては

と思います。私のがちに病児保育室を開設したときに名づけた子どもサポート H&K の名前はそういう意味を込めているのです。働く親の子育て支援には違いないけれど、まずは子どもの視点を大切にしたいとそれを理念の第一にあげています。

そして、性をもった一人の人間として、生きる力を育む教育は生まれた時から始まっており、一番大切な時期が乳幼児期だということも、身に染みて体得したことです。この時期に安心できる居場所があり、安心できる大人がそばにいてくれる、それがあってこそ自立にむけて歩めるのですね。

私がこんなことをくどくどと書くのは、学校に勤めたこの 17 年間に私の子ども観の根幹が形成されたと思っているからです。

私自身、子育てには負い目があり、記憶から消し去った部分も多いのか、あまり思い出さないので、なにかの刺激で記憶から引き出された時、苦しさで体がこわばってしまうことがあります。

大人になったわが子の子育てを見て、過去の自分がやってきたことのツケがこれだと思えるとき、出来の悪い自分をそこに見るからです。

最初の病院勤務を辞めて家を出た時、夫に居所がわからないよう、開拓村の無医地区を含む山村に移り住みました。誰も知らない、夜遅く帰ると玄関にきつねが座っているようなところでした。そこで 5 年あまり、赤ちゃんからお年寄りまでの健康相談や、保健所と一緒に、食生活改善推進運動等々、地域の保健婦さんとして車で走り回るような仕事をしていました。すべてが一からの勉強でした。さみしい時も、悲しい時も、今はここで出来ることをしよう、ここでしかできないことをしようと自分に言い聞かせ、心を平静にして頑張ってきました。でもその分、子どもにも辛さを押し付けてきたのは確かです。保健婦は村役場で私一人でしたので、行事が決まっているときは休むことが出来ず、発熱した時も、枕元にお昼ご飯をおいて仕事に出かけました。当時、上が小

学 2 年、次が小学 1 年、一番下は 3 才でした。一緒に遊ぶ時間も少なかったと思います。けっして良い親ではありませんでした。それでもよくぐれないで育ってくれました。遊ぶことといえば虫取りぐらいしかなかったのが、かえってよかったですでしょうか。この時のわが子にしてやれなかったことの後悔が、第二の人生に子育て支援を選んだ理由の一つだろうと思います。罪滅ぼしのようですが、単に子育て体験をもっとしたかったというだけかもしれません。

今のパートナーは、進学校の英語の教員でした。知り合ったのは、私学カウンセリング研究会の研修を通じてで、お互いさみしい者同士が寄り添ったという感じです。それぞれに、子どもが三人るので、一方が亡くなった時に、もめごとが起きないように、入籍しないことに決めました。お互いにもたれあわずに、自分のことは自分です、そのうえでなにかあれば助け合う、それが条件で、住居もマンションの隣同士でベランダから行き来できるようにしています。これがとても住み心地のいい関係を作って今に至っています。

あるとき、なにかの話をしていて、彼が自分の仕事に自信と誇りを持っていないことに気づき違和感をおぼえました。あんなに遅くまで授業の準備をし、問題作りや採点に追われ、一人ひとりにコメントまでつけて答案を返しているのをみていたので不思議でした。同時にやるせない気持ちがして、問い詰めたと思います。実は本当にやりたかったことは進学校の教師ではなく、幼子の心に寄り添えるような仕事がしたかったのだと言いました。女々しい仕事だと、父親に反対されて出来なかったと。なんだ、だったら、今からでもやったらいい。残りの人生、やりたいことをやったら？

他人事だと思って無責任に言ったこの一言で、彼は私が予想もしていなかった方向に急に舵を切って走り始めたのです。「べきにんちゃん」というあだ名を持つ彼（すべき、ねばならない、という

硬い考えを持って行動する生真面目な人という意味)は、63歳の定年を待たずに60歳で辞め、保育士専門学校に入学したのです。

18歳の女の子たちと机を並べ、初老のじいちゃんが「保育」なんぞ勉強する様は、めずらしかったでしょう。学校側は、マスコミに流したりして、人寄せパンダあつかいでした。今思えば、よく頑張ったものです。若者と一緒の体育は、きつかったでしょうし、図書室を学生がもっと活用できるようにと、開室時間を長くするよう学校側と交渉したりするなど、大活躍でした。

家に帰ってからは毎日ピアノのレッスンで、同時刻になると、たとえ旅行中であっても勝手に指が動くのですからたいしたもの。60歳を過ぎて初めて弾くピアノ。腱鞘炎にもなり、それは大変な努力でした。

そしてクラスメートたちと一緒にいったカナダ研修旅行。向こうの保育園で実習をともにした仲間とは、今も交流が続いています。生真面目な一方で、おしゃべり好きなおばちゃん風の彼は、女性集団にすっかり溶け込んでいました。

めでたく三年制の学校を卒業したあと、さらに一年間の研修を積んで、学校初の社会福祉士資格を取りました。同輩、後輩にもよい刺激になったようで、そのあと数人の合格者が続き、嬉しいことでした。

私はあまり人を褒めない人間ですが、当時の彼と同じ年になって、さらに彼のすごさがよく分かります。いま同じようにしろと言われても、とてもできるものではありません。その勤勉さ、学習意欲、努力、社交性、そしてなによりも素直さです。私にはそのどれもありません。どちらかというと、一匹オオカミで男性的な私(いつの間にかそうってしまった)にくらべ、女性的な彼。こうした性格の違いが、一緒に仕事をするにはよかったと思います。

彼が一年間保育所勤務をして経験を積んだあと、二人は同じ方向を向いて、スタート地点に立ちました。やりたいことはいろいろありましたが、二人でやれることに焦点を絞り、そこを核に手足を伸ばせばいいのではということに落ち着きました。私が55歳、彼が66歳の時でした。

